

百年料亭ネットワーク の取り組み学ぶ 月例議員勉強会



上越市議会では、定例議会のない月には定期的に議員勉強会を行っています。

4月の勉強会では、市内のある料亭が中心になって、100年以上たつ建物で営業している全国の料亭に呼びかけて取り組んでいる「百年料亭ネットワーク」を学びました。

この取り組みは、上記のような料亭が、いずれも経営や建物の維持に困難を抱えている現状から出発し、健全経営、建築物の維持・保存・継承、料亭文化の継承、周辺の街の活性化などを目的にしているプロジェクトです。

困難を逆手にとって、全国に呼びかけて互いに交流しながら発展方向をさぐるという興味深い取り組みです。連携での新機軸も模索されているようです。今後の動向が注目されます。

日本共産党上越市議員団ニュース

No. 544 2017年4月30日・5月7日

連絡先	橋爪 法一	090-5392-1961	(吉川区代石)
	橋本 正幸	080-1980-9855	(三和区鴨井)
	上野 公悦	090-7260-9407	(頸城区中柳町)
	平良木 哲也	090-1808-6919	(上中田)

新幹線はあくまでもまちづくりの手段

米山知事 タウンミーティング

24日、米山知事は就任してから初めての「タウンミーティング」を上越市で行いました。「鉄道と連携した地域活性化」をテーマに、パネルディスカッション形式で行われました。

パネルディスカッションは、地域調査が専門の榎引素夫青森大学教授をコーディネーターに、高田まちねっと代表の宮越紀祐子さん、フルサットの平原匡さん、頸南バス専務の佐藤 英明さん、それに米山知事の4人をパネリストにして進められました。

最初に、榎引教授から、高田駅前の360度パノラマ写真が示され、「この写真には主に外国人観光客から10万を越えるアクセスがある」と紹介されたことを皮切りに、パネリストからの報告がありました。

宮越さんは、「観光列車『雪月花』が高田駅に90分停車する機会に高田の町歩きを楽しんでもらおうと、いろいろなもてなしをした。その中で、観光客の『雪国高田の暮らしを知りたい』というニーズがわかってきた」と発言しました。また、平原さんは、フルサットを約1年半かけて設置し、多くの人に利用されていることを報告しました。さらに佐藤さんは、「妙高高原ライナー、笹ヶ峰直行バスを運行して成果を上げている」「こうした季節運行バスを地元のスキー客も利用することが発見できた」と発言しました。

これらに対し、榎引教授は、「駅前にはビルがないと気がすまない人が多いが、どんなビルなのか問題だ。立派な高層ビルを建てても、中身が伴わなければ無意味。」と指摘しました。

味。上越妙高駅西口のフルサットにはしびれた。しかし、外の人間に言わせると、どうして高田駅にフルサットの模型を創ってPRしたり、上越妙高駅で町歩きのもてなしたりしないのか。外の人間は足し算をするが、それが大事ではないか」と指摘しました。

これらに対して、米山知事は「地域の再デザインをするという発想が欠けていた。足し算は行政の役割だと思う。地域の発想をしっかりと支えていきたい」と、市民のいろいろな取り組みをバックアップしている姿勢を示しました。

その他、榎引教授からは、「飯山市では、在来線との接続が良くないこともあるが、その待ち時間を利用して雪上バイクを楽しむなどの工夫がされている」「上越はネットでの情報発信が弱いのではないか」「インバウンド客にとっては、駅前のワイファイ環境の整備が非常に大事だ。北海道の木古内町は人口4400人の小さな町だが、駅前に整備されている」などの示唆に富む発言がありました。

榎引教授はまた、「新幹線は観光列車ではなく、医療連携のための列車だ。まわりに何も無いといわれた新青森駅には大きな病院が建設されている」「新幹線はあくまでもまちづくりの手段だ。新幹線の利用を義務にしたり目的にしたことは本末転倒だ」などと



指摘しました。

会場からは、「新幹線利用者が在来線を利用して高田・直江津に足を運ぶしくみ作りが大切ではないか」「鉄道は生活の足だ。観光も大事だが、生活、産業、医療の視点を持つことが必要ではないか」といった意見が出されました。

最後に榎引教授が「弘前や八戸の成功事例を見ると、新幹線の最大の効果は、交流人口の増加などではなく、地域の連携が進み、地域づくりのスイッチが押されたこと。新幹線の開業は卒業式のない入学式であり、死ぬまで学べる機会だ」と締めくくりました。